中央大学におけるキャンパスの潮流

みなさんは、現在、中央大学にいくつキャンパスがあるか、ご存知だろうか。答えは4つである。キャンパスが開校された順に言えば、後楽園、多摩、市ヶ谷、市ヶ谷田町となる。

ここ2年、コロナ禍でその様相は一変した。だが、キャンパスが大学存立の基盤であることに変わりはない。そこで、改めてその歴史を振り返ってみたい。

キャンパスの始まり

1885年、英吉利法律学校が開校時に用いたのは神田錦町（現千代田区）に所在した旧旗本屋敷であった。それが講師と生徒が集う研鑽の場（キャンパス）の始まりだった。この神田錦町のキャンパスは、1926年まで41年の歴史を刻んだ。

その間、最も特筆すべきは1920年それまで専門学校であった本学が大学令に準拠した法・経済・商の3学部と大学院及び大学予科からなる総合大学となったことである。今から101年前のことだ。

神田錦町から駿河台へ

ところで、戦前の中央大学は大学令に準拠した大学部とともに専門学校令に拠った法・経済・商の3学科からなる専門部があった。この二つの教育組織からなる中央大学は、学生数の増加に伴い神田錦町から昭和初年に駿河台（現千代田区）へと舞台を移した。

戦後、新制の中央大学が発足すると駿河台キャンパスはその学びの場となり、その一方、旧制の中央大学は幕を下ろすこととなる。1950年前後の駿河台キャンパスには、旧制の終焉と新制の誕生の二つの歴史が存在した。

駿河台と後楽園

さて、現在、理工学部が所在する後楽園キャンパス（文京区）は1951年の購入当初運動場用地であった。それが新制中央大学の工学部を前身とする理工学部の拠点となるのは1963年のことであった。以後、法・経済・商・文の文系4学部が駿河台を、また理工学部が後楽園を拠点とする時代となり、ここに2つのキャンパスを教育研究の場とする源流が生まれた。そして、この駿河台と後楽園によるキャンパス体制は、1980年の駿河台校舎閉校まで続いた。

駿河台キャンパス全景（1970年）

後楽園と多摩、その後

この2つの都心キャンパスのうち駿河台に変わって姿を現したのが、多摩キャンパス（八王子市）であった。そのキャンパスには1978年に駿河台の文系4学部が全面移転した結果、ここに後楽園と多摩からなる新たなキャンパス体制ができた。

都心と郊外を拠点とする2つのキャンパス体制に変化がもたらされたのは、2000年に市ヶ谷キャンパス（新宿区）が、また2010年に市ヶ谷田町キャンパス（新宿区）が開校し、都心に大学院やロースクールなどの高度専門職大学院の教育研究の場が新たに設けられたことによる。

こうして、後楽園、多摩、市ヶ谷、市ヶ谷田町の4つのキャンパスが形成されたのである。ちなみに、市ヶ谷田町キャンパスが開校した2010年は創立125周年にあたり、それを契機にしてその後の都心展開が本格化していくのである。

キャンパスの今 ― 2大キャンパス構想へ ―

2015年、中央大学は「Chuo Vision 2025」を策定し2025年までの中長期事業計画を公表した。今年度その第2期を迎え、キャンパスについては「人類の未来を拓き、常に新たな社会的価値を創出する総合キャンパスの構築」を掲げている。そして、この計画に基づき茗荷谷（文京区）と駿河台（駿河台記念館跡地）の2つのキャンパスの整備が進められている。

明治時代の神田錦町に始まる中央大学のキャンパスは、その後駿河台へと向い、戦後駿河台と後楽園の2つのキャンパスを拠点とする時代に至る。そして、この2つのキャンパス体制が1978年以降多摩と後楽園へと受け継がれたのである。このような中央大学の2つのキャンパス体制の潮流が、現在の郊外の多摩と後楽園を中核とする都心部のキャンパスからなる2大キャンパス構想へと繋がっているのである。

キャンパスの歴史一つとって見ても、大学は時代とともに生きているのである。

後楽園キャンパス全景（1963年）

【お詫びと訂正】 本誌前号の本文中、約15万㎡とあるのは 約15万坪の誤りです。お詫びして訂正します。